

イザヤ書 56 章 1 《2-5》、6-7 節

ローマの信徒への手紙 11 章 13-15、29-32 節

マタイによる福音書 15 章 21-28 節

本日の旧約日課は、イザヤ書です。ただし56章ですので、イザヤ書の中でも後半部分です。バビロン捕囚という、王国としてのイスラエル崩壊を経た状況から書かれています。つまり、主なる神様を信じる人々は存在するのですが、神の王国の民としては存在していなかった時代です。そのような中で、今日の個所の冒頭は、「主はこう言われる。公正を守り、正義を行え。私の救いが到来し、私の正義が現れる時は近い」（イザヤ 56：1）と告げます。そして、聖書日課では《》に入っていますが、「主に連なる異国の子らには言ってはならない、『主はご自分の民から私を分け離す』と」とあります。「異国の子ら」という部分は、新共同訳では「異邦人」となっていましたので、新しい訳は少しニュアンスが異なりますが、イスラエルではない人々も、主なる神様から区別されると考える必要はないと語られている点は同じです。

そのことを受けて、「また、主に仕え、主の名を愛し、その僕となった、主に連なる異国の子ら、安息日を守り、これを汚すことのないすべての人が、私の契約を固く守るなら、私は彼らを私の聖なる山に導き、私の祈りの家で喜ばせよう」（イザヤ 56：6-7）と続きます。イスラエルであるか異邦人であるかが問題なのではなく、「主に仕え、主の名を愛し、その僕」となること、そして、主なる神様の「契約を固く守る」ことが大切なのです。そして、そうする人々はすべて、イスラエルが占有していた「聖なる山」（エルサレム）に導かれ、「祈りの家」（神殿）で喜びを得ると語られます。これらは、バビロニアを滅ぼして、ユダヤ人をその捕囚から解放した、異邦の国ペルシャの王キュロスが、メシアとされたことと同じように（イザヤ 45：1）、イスラエルであるか否かではなく、主なる神様の視点から見て、正義を守り、恵みの業を行うことこそが、最も大切な事柄であると示しています。

次に使徒書、ローマの信徒への手紙を見ますと、そこでパウロは、「あなたがた異邦人に言います」（ローマ 11：13）と始め、異邦人に対して、「あなたがた（異邦人）は、かつては神に不従順でしたが、今は、彼ら（イスラエル）の不従順によって憐れみを受けています」（ローマ 11：30）と述べます。ここだけ読みますと、主なる神様に従順であったユダヤ人が不従順になり、それに代わって不従順であった異邦人が、従順な存在となったように語っていると思えますが、そうではありません。最後にパウロは「神はすべての人を憐れむために、すべての人を不従順のうちに閉じ込められたのです」（ローマ 11：30）と述べているからです。パウロは、ユダヤ人はユダヤ人の信仰のあり方があり、異邦人はイエス・キリストを通じた新しい信仰のあり方があり、それぞれがそれぞれの仕方で、主なる神様に対する不従順から従順へと導かれる時、主なる神様の憐れみによって、両者ともに救いがあると示しているのです。ただし、パウロ自身としては、イス

ラエルがすべての異邦人とともに、主イエス・キリストへの信仰を通して、主なる神様の救いにあずかってほしいと願っていたと思います。

イザヤ書もパウロも、主なる神様の救いは、イスラエルにも異邦人にもおとずれると語っていると思うのですが、福音書の物語は少し趣が異なります。この物語は、カナンの女の人が、その娘の癒しを頼んだにも関わらず、「しかし、**イエスは何もお答えにならなかった**」(マタイ 15:23)と始まるからです。

カナンの女は、マルコ福音書の並行箇所では、ギリシア人となっていますが(マルコ 7:24)、いわゆる異邦人です。女の方は、「**憐れんでください**」と叫ぶのですが、イエス様は、「**この女を追い払ってください。叫びながら付いて来ます**」(マタイ 15:23)という弟子たちの言葉を受けて、「**私は、イスラエルの家の失われた羊のところには遣わされていない**」(マタイ 15:24)と言って、その女の人の願いを明確に断ります。その女の方は、さらにひれ伏して「**私をお助けください**」とまで言うのですが、イエス様も、さらに「**子どもたちのパンを取って、小犬たちに投げてやるのはよくない**」とまで言って、この女の方の申し出を断ります。ここだけを切り取って考えるならば、異邦人で苦しむ人の叫びに答えない、異邦人で助けを求める人を助けないイエス様となってしまいます。しかし、この女の方が、「**主よ、ごもつともです。でも、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただきます**」(マタイ 15:27)と語ったとき、イエス様は、その女の方の言葉と姿勢に信仰を見出し、「**女よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように**」(マタイ 15:28)と語ります。そして、物語は、「**その時、娘の病気は癒やされた**」と、イエス様が何の行動をしていないにもかかわらず、その言葉だけで、瞬時に時間と空間を超えて、娘さんが癒やされたと告げるのです。物語は当初、イエス様が異邦人に対するユダヤ人の優位性を主張していたように示していたのですが、それは物語のレトリックでした。物語は、イエス様・主なる神様に対して、人はどれだけ謙虚であるか、また真摯に何かを願っているか、それがその人を救いへと導くこと、信仰であることを示していたのです。聖書の小見出しが「カナンの女の信仰」となっている通りです。

ここでも、「**主に仕え、主の名を愛し、その僕**」となっていること、主なる神様に対して「**不従順**」ではなく、「**従順**」であることが、大切な事柄として示されています。そして、主なる神様は、人間がそのように歩むとき、人間のありとあらゆる価値判断を超えて、時空も超えて、人間を救いへと導くのです。

教会に集められるわたしたちは、異邦人でありまた新しいイスラエルでもあります。そして、そうであるがゆえに主なる神様の救いに与る者ですが、そのわたしたちにとって大切な事柄とは、主なる神様に対して謙虚でありまた従順であることです。信仰者とは、また教会とは、そのことを示す存在であるともいえます。一般的に謙虚さは美德であり、また人間の作り上げる組織もそれへの従順さを求めます。しかし、わたしたちが謙虚となり従順となる対象は、『聖書』が示す主なる神様です。そして、その方にこそ、人間の思いを超えた救いの実現があります。そして、人間の思いを超えた平和の実現も、そこにあります。そのことをこれからも信じ続けたいと思います。